

〈報 告〉

韓国研修から学んだこと

黄 京性, 佐久間千絵¹⁾, 内海 智¹⁾, 高橋 涼子¹⁾, 永野 裕三¹⁾, 尾谷 幸一¹⁾

¹⁾ 丘の上学園

A study through visitation of a welfare institution in Korea

KyeongSung HWANG, Chie SAKUMA, Satoshi UCHIUMI
Ryouko TAKAHASHI, Yuzo NAGANO, Kouichi OTANI

1. はじめに

平成18年11月4日～11月7日迄私たち研修メンバーは韓国に滞在し、韓国の障害者施設を2箇所訪問しました。一箇所目の施設は「長峰恵林再活院・療養院」という施設で、2箇所目の施設は「福祉館」という施設でした。これらの施設は韓国で一、二を争う施設であるという話を聞き、研修前はどんな施設なのか大変楽しみにしていました。実際施設を見学し、驚きと感心の連続でした。学ぶ事も多く、今後の仕事に活かしていきたいと思いました。その為に本研修で学んだことを以下にまとめ、この文章を自己啓発剤として活用していきたいと思います。

2. 「長峰恵林再活院・療養院」を訪問して

長峰恵林再活院・療養院では利用者の障害程度と類型に従って再活院と療養院に区分しています。90人あまりの知的障害者を対象に自立に向けた支援及び重度の障害者については居住環境と基礎生活サービスを提供し個人の要望に沿う支援を提供しています。広い敷地の中で居住スペース、仕事場、余暇空間が設置されており、施設全体が一つの町になっているという印象を受けました。当施設では利用者が将来一般的な環境にいち早く適応するために、一般住宅と同一の環境を提供し、支援をしていました。利用者個々のライフサイクルと障害程度に基づきグループを編成し、個々に合ったサービス支援を提供していました。企業とボランティアを活用し、利用者が地域社会に溶け込みやすくなるよう一般市民と触れ合う機会を多く設けていました。国の予算だけでは賄えない運営資金を、民間の企業をうまく活用することで資金を賄っていました。職員は民間から資金を得るために、新しい事業をどんどん展開していく。するとさらに資金を得ることができるため常に意欲的に仕事を進めることができる。この様に職員の意欲を低下させない工夫がありました。職員はチームを形成し、各チームで相互間の競争を誘導し、入所者中心のサービスに向けて努力していました。



写真1 長峰恵林再活院・療養院にて

これらのことを受け、自立に向けての支援方法の具体化と、個別支援計画に基づくサービス提供の徹底化、地域とのつながりの強化、ボランティアの活用、職員のスキルアップ、機能性の高い職員配置の必要性を感じました。今回の訪問で当施設は職員の意識や能力が大変優れていると感銘を受けたと同時に、私達も様々な事業に取り組んでいかなければならないと仕事への強い意欲を掻き立てられました。

3. 「福祉館」を訪問して

福祉館では知的障害に限らず様々な障害を持つ人々 200名～300名を対象に、ライフサイクル別にチームを設け、児童に対しては言語や心理のケア、青少年に対しては放課後や余暇の提供、成人には就労サポートや就労訓練等に於けるプログラムを作成し、それに基づく支援を行っています。主にデイケアを行っていますが、一般の賃貸マンションを利用して自立に向けて教育を行う「教育型」、社会復帰を目指す「自立型」、高齢障害者を対象にした「高齢者型」と大きく3つに区別し、グループホーム支援も行っていました。当施設はシスターが運営をしており、広い敷地の中には教会や修道院も設備されていました。ここでも職員だけでなくシスターを支持する多くの一般市民が主体的にボランティアを行い利用者をケアしているそうです。ここではボランティアを機能させるために2段階に分けてボランティアを育成させます。第一段階では適性を判断し、適性がある者については第二段階で専門性を教えるシステムが組み込まれていました。社会統合理念に沿って、障害者がいかに健常者と共存するかを考え、一般市民のボランティアを集めるだけでなく、自ら地域に赴き地域に馴染んでいく。これが当たり前のように行われていました。職員同士の対話を行い、福祉館の職員はサービスの仕組み、方針、運営の仕組みを理解した上で個々に合った支援を提供し、自立に向かうプロセスを頭の中に描いている様子が伺えました。青年の利用者と対話した際、利用者は自分と同じような知的障害者が日本ではどのような仕事をしているのかということに大変興味を持っていました。その利用者からは地域社会に出たいという意志を感じました。

これらのことを受け、ボランティアの養成、地域と連携を持つための具体的方法、職員の意識の向上と、チーム運営の方法理解、利用者の自己実現に向けて具体的且つ現実的なプログラムの作成が必要と感じました。

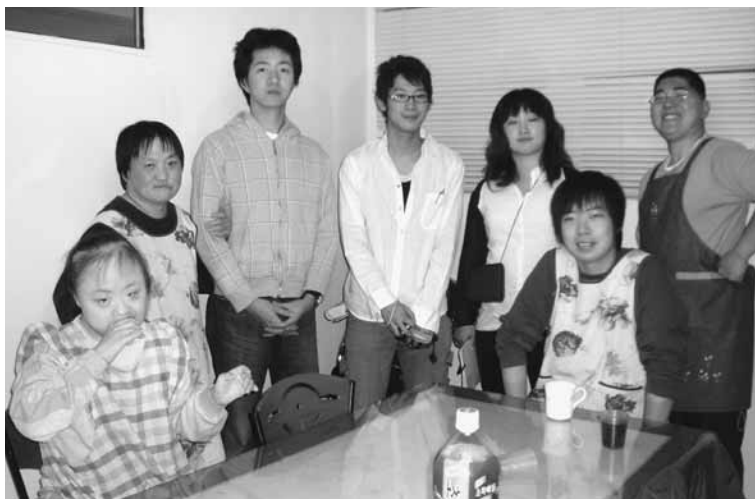


写真2 ノトルダム総合福祉館

4. 全体を通しての感想と今後の課題

二つの施設を訪問しましたが、どの施設でも多くのボランティアが活躍し、地域との連携なくして支援はできないという基本姿勢を持っていると感じました。我学園でもボランティアを募り野外でレジャースポーツを楽しむという場を設けていますが、ボランティアの適性や専門性を追及することなく、参加してもらうだけの時間になってしまっていました。せっかく利用者に関わりたいと意欲を持って一般市民が歩み寄ってくれたのに、受け入れる体制を作っていなかったため何も機能せず、その好意を無にしにしまったと思いました。改めてボランティアの重要性に気付かされました。体制を整えることはボランティアの受け入れのみではなく、あらゆる事業を展開していく上で大変重要なことです。私たちが訪問した施設では職員が個々に意欲を持ち、自分の知識と創造性を持ってチームを組織し、プログラムを形成し、事業を展開していました。韓国の施設職員と接していると、彼らは常に意欲的で行動力と向上心に満ち溢れているという印象を受けました。そんな彼らが作った体制は確実なものに違いないと思いました。

他に、施設長との対談で常に障害者福祉政策とその歴史についての意見交換がありました。正直なところ

私は普段それらを意識して支援に当たっていませんでしたが、飛び交う福祉政策に対する意見を聞き、この仕事をしていく上で障害者福祉政策とリンクして考えなくてはならないことは山ほどあることを感じました。その為それらに対する知識を一層深めなくてはならない、またそれに対して自分の意見をしっかり持たなければならぬと強く思いました。

今後具体的に私たちがしていかなければならないと考えたことは多くありましたが、まずは利用者が自立をするために、利用者が個々に自分らしい生活を送るために職員は何をしていかなければならないのかを、チームで話し合い実行するという形を励行化させることが必要だと思います。ここでも事業所ごとに職員が割り振られ、チームは出来上がっているもののなかなか機能していません。チームが果たす役割、その役割を果たすための個々の役割を全員が考え共有していかなければなりません。職員同士で協議出来る環境を職員自ら作り出していく事も必要です。

次にボランティア、地域、企業やその他機関との連携強化により、充実した地域福祉を目指すことです。今後地域や企業へのアピール、ボランティアの養成強化を図り地域に根ざした福祉施設を目指していきたいと思いました。

最後に個々のスキルアップのために、職員の協議の場をできるだけ多く持ち、情報や意思を共有することが必要だと思います。互いに切磋琢磨し合い、職員の質を高めていくことで支援の質も上げていきたいと思いました。

5. おわりに

今回の研修で当たり前の様に地域と施設が共存している様子、自立を願う利用者の声、それに応えようとする職員の情熱とプロ意識に私は圧倒されました。私達は「利用者の自立を目指し」と謳っているものの実際それに繋がる支援サービスを提供する事ができているのだろうか、常に問題意識を働かせ、職員同士でそれを解決するために一丸となることはできるのだろうか、自分の満足度を得るためにどれだけの努力をしてきたのだろうか、不可能であるということを前提にし、可能にする努力を怠っていないか様々な思いが頭を過ぎり、何て自分はちっぽけなんだろうという思いにさせられました。しかしそれと同時に自分に課する目標を定める事が出来ました。自ら提案し具体化する意欲と技術の向上を図るために知識を養い、利用者へサービスを提供し、満足度を得る。現在ある問題と正面から向きあい、解決方法を探っていく。そして確固たるプロ意識を築いていこうと改めて考え直す事ができました。

国境を越え、異文化に触れながら自分と同じ職種に就いている人間と触れ合う。そこから多くの刺激を受け、今後の意欲に繋がりました。今後も自己啓発のため、チーム強化のため、今回の研修で出会った人々との繋がりを大切にしていきたいと考えました。